

「役立たず」と嫌われた
悪役令嬢ですが、

最強パパに愛されながら
自由に生きます！2

**セルゲイ・
ランドナー**

ディートリヒの
学院時代からの友人。
帝国随一の医術魔法の使い手。
妻を亡くし、忘れ形見の
レミとともに暮らしている。

**ヴィレン・
イルディヴィート**

竜族の少年。生意気な性格で
周囲を振り回す。
ルクレツィアに淡い恋心を抱く。
グリムの弟子になったが
言うことを聞かない。

**グリム・
ベガ**

イスラークに住む
ダークエルフの軍人。
ルクレツィアに兄と慕われ、
ヴィレンにライバル視
されている。

レミ

母を亡くし、父セルゲイとともに
暮らしている。
友人がおらず、ルクレツィアと
友達になれたことが嬉しい様子。

**ルクレツィア・
クラウベルク**

ディートリヒの一人娘。
魔力なしのため
周囲から蔑まれていたが、
優しい家族や友人に囲まれ
楽しい日々を送っている。

**カイン・
スペンサー**

ディートリヒの甥。
無口で不愛想だが、
優秀な魔術士。
従妹のルクレツィアを想い、
たまに突飛な行動に出る。

**ディートリヒ・
ヴィル・クラウベルク**

マルドゥセル魔導帝国の
公爵で、国内随一の
氷魔法の使い手。
娘のルクレツィアを
溺愛している。

登場人物紹介

Characters

第一章 少女と西の魔塔主

「——いいでしょう。その依頼、承ります」

落ちていた柔らかな声が、オルク伯爵の頭の上に降り注いだ。オルク伯爵は顔を上げ、藁にも縄すがのような必死な面持ちで男を見る。

男は片眼鏡モノクルの奥から、慈悲深い眼差しを向けて、オルク伯爵を見下ろしていた。

「ほ、本当ですか……？」

オルク伯爵の目の縁ふちに、じわりと涙が滲む。

「本当に、娘の手を治していただけると……？」

男は肯定するように、清涼な水を思わせる青髪を揺らす。そして、優しい微笑をオルク伯爵に向けた。

「私の研究は、貴方のご息女のような、体に傷を持った者のためにあるのです」

男の名はセルゲイ・リンドナー。

「私が開発した人工皮膚の移植手術を行いましょう」

セルゲイはそう言って微笑みを深くする。

オルク伯爵はボロボロと涙をこぼしながら感謝の言葉を呟き、セルゲイを拝むようにして両手を組んで再び頭を下げた。オルク伯爵にとって、彼の微笑みは神の救済のように見えた。

半年前、オルク伯爵とその一人娘は、ヴァイスローズ公爵家で開催されたローズ・ガーデンパーティーに参加した。子供達のルクレツィアに対する虐めが明らかとなったあの日から、オルク伯爵家の未来はめちやくちに壊れてしまった。

クラウベルク公爵家から数年分の虐めに対する多額の慰謝料を請求された。その額、なんと伯爵家の一年の収入の約半分……そんな大金、払えるはずもない。

オルク伯爵は、娘は公女エリーチカに逆らえず、仕方なく公女ルクレツィアの虐めに加担したのだと皇帝と皇后に訴えた。何度も皇宮へ足を運び、何度も嘆願してやっと恩赦を受けられて、慰謝料を三分の一の額まで減額してもらえた。それでもしがない伯爵家にとって大打撃なことには変わらない。

しかし、不幸はそれだけでない。ヴィレンとかいう竜の炎に焼かれた娘の手は、どんな名医も治せないほど深刻な火傷を負った。これ以上の回復を見込めないと、ついに国中の医者から匙を投げられてしまうほどに……

さらに、「虐め」という体裁の悪さにより、決まりかけていた娘の婚約が白紙に戻されてしまった。別の家門と新たな婚約を結ぼうにも、娘の焼け爛れた醜い手を見て、話を進めたがる者はいなかった。

オルク伯爵は最後の望みをかけて、長年医療魔法を研究しているという噂の、西の魔塔主に会いに、ここまでやって来たのだった。

「火傷を負い、婚約も白紙になって、娘は笑顔を見せなくなった……しかしこれで娘も、きつと再び笑ってくれるはずだ！」

オルク伯爵は、今も自室に引きこもり泣き暮らす娘を想いながら、涙目のまま歓喜した。

セルゲイは優しい瞳でオルク伯爵を静かに見つめながら、軽く手を挙げる。

すると、机の引き出しが勝手に開き、その中から一枚の紙が浮いて、オルク伯爵の目の前で飛んできた。

「契約書です。ご確認ください」

内容に目を通すと、オルク伯爵令嬢の手を治す代わりに、オルク伯爵は多額の報酬を支払う、というもの。

慰謝料に比べれば安いものだが、今のオルク伯爵には苦しい……しかし、娘の未来には変えられないと、オルク伯爵は頷いてペンを手に取った。

セルゲイとオルク伯爵それぞれが契約書にサインをすると、契約魔法が発動して紙が金色に光り、契約完了を知らせる。

オルク伯爵はその瞬間、娘の手の治療に目途がついた安心感から一気に身体の力を抜け、ソファに深く沈み込んだ。

「しかし、ご息女がそこまで酷い火傷を負うなんて、一体何があったのです？」

セルゲイが世間話を振ってくる。すると今度は、オルク伯爵の心に沸々と怒りが込み上がってくる。

「それもこれも、あの忌々しいクラウベルク公爵家のせいです!!」

突然怒りを爆発させたオルク伯爵に、セルゲイは驚いて肩をすくめた。

オルク伯爵は半年前のローズ・ガーデンパーティーでの出来事をセルゲイに話して聞かせた。自分の娘がルクレツィアを虐めていたことは巧みに隠し、いかにクラウベルク公爵家が傲慢で悪辣かを熱弁した。公爵本人を前にすると何も言えなくなるが、こうして陰口を叩くのは容易い。

「娘は手だけではない、心にも傷を負っているのです!」

オルク伯爵の興奮は最高潮に達した。

「だから娘はあんな訳のわからないことを……人が他人の魔力を吸収するなんて、荒唐無稽な話を、何度も私に訴えかけてくるのです!」

その時、黙って話を聞いていたセルゲイの動きが止まる。

「……魔力を、吸収?」

「おかしいでしょう? 人族が魔力を吸収できるわけがない。できるのは竜族だけ……だから、竜は最強種と呼ばれているわけです」

オルク伯爵は前のめりになっていた姿勢を正すと、自身を落着かせてから話を続けた。

「それなのに、娘はクラウベルク公女に魔力を吸われたと度々騒ぐのです。気の毒なことに、すっかりそう思い込んでしまっている。公女は役立たずの魔力なしなのに……」

度重なる不幸で、娘は心を病んでしまった、オルク伯爵はそう決めつけていた。

セルゲイもソファアに深く座り直し、オルク伯爵に尋ねた。

「私は、ご息女のお話に興味がありますね。詳しくお聞かせ願っても?」

「なんと。子供の戯言ですよ?」

オルク伯爵は目を丸くしながらも、恩人のために、娘から聞いた話を一から説明した。

オルク伯爵が退室していく後ろ姿を見送った後、セルゲイは静かに窓辺に立った。

「魔力なしの、ディートリヒの娘……」

何を考えているのか、セルゲイはどこか憂いた表情を浮かべていた。彼の瞳は窓の外の景色を見つめているようで、見ていない。もっと、ずっと遠くを見つめているような目をしている。

「ルクレツィア・クラウベルク、か……」

そして淡い笑みを浮かべながら、偉大なる魔術師が最も大事にしている愛娘の名前を呟いた。

今、何を考えているのか。それは、彼にしかわからない。ただ……セルゲイが今、満たされたような表情で微笑んでいることだけは確かだ。

しばらく窓の外の景色を見つめていたセルゲイはおもむろに身を翻し、執務室から、さらに奥へと続く部屋に入ってしまった。

執務室から続くその部屋はセルゲイの私室で、室内には表向きの研究資料だったり、これまで魔塔を訪れた客のリストだったり積み上げられている。セルゲイはそんな資料の山には目もくれず

に、ひっそりと壁際に佇むクローゼットへと向かった。

着替えるつもりだろうか、彼はクローゼットの取っ手を掴む。そして扉を開けた……と思ったら閉める。また開いてと、その奇怪な行動を何度か繰り返していると……カチリ。と、機械仕掛けの音が鳴った。今度こそ、セルゲイはクローゼットの両扉をゆっくりと開ける。

するとそこには、真つ暗な地下へと続く、どこまでも長い階段が現れた。

セルゲイの顔には先ほどまで浮かんでいた柔らかな笑みは消えている。その暗闇の中へと、セルゲイは姿を消していったのだった。



短い秋が終わり、すっかり雪が積もる季節。イスラークをはじめとする北の領地には、これから半年以上続く、長い冬が訪れたばかりだった。

ルクレツィアは雪銀の魔兵団の訓練所の隅にあるベンチに腰を下ろし、グリムとともにヴィレンの訓練が終わるのを待っていた。

「ルクレツィア、寒くない？」

「お兄様が用意してくれたブランケットのおかげで寒くないよ」

ルクレツィアは柔らかな生地のブランケットを肩にかけて、隣に座るグリムに笑いかける。グリムの赤い瞳と目が合うと、彼も笑い返してくれた。

訓練所の中央からは、騒がしい声が聞こえてくる。

「おい、ヴィレン！ 竜の翼で飛ぶのはずるいだろう!？」

「これも俺の能力なんだ！ 悔しかったらお前も飛んでみるよ！」

「このクソガキ!! 生意気すぎるぞ！」

組み手中のヴィレンと雪銀の魔兵団の若い兵士が怒鳴り合っている。グリムは呆れた目で遠くにいるヴィレンを見たが、ルクレツィアはクスクスとおかしそうに笑っていた。

「ヴィレンは今日も、しっかりヴィレンだなあ」

「ヴィレンのやつ、訓練を舐めすぎ。後でちゃんと説教してやらないと」

説教が確定したヴィレンを憐れみながらも、ルクレツィアは楽しかった。

雪銀の魔兵団の優秀な兵士であり、多彩な魔法を熟知する召喚師のグリムが、正式にヴィレンの魔法の先生になって二か月ほど経った。グリムに言わせるとヴィレンはまだまだ未熟らしいのだが、ルクレツィアには、ヴィレンは魔法を使うのがすごく上手になったように思う。

（前は火を噴くことしかしなかったのに……今では、色んな魔法を少しずつ工夫して使ってる）

今も、ヴィレンは風魔法を翼にまわらせて素早く飛び回っている。イキイキとたくさんの魔法を使うヴィレンを見ていると、やっぱり……羨ましい。

「ルクレツィア？」

グリムに呼ばれて、ルクレツィアはハッと我に返った。

（ううん魔法が使えなくても、私だつてたくさん本を読んで勉強してるもん！ カインお兄様に

もらった『世界樹の芽』も、随分と大きくなったんだから！

小指くらい小さかった芽が、今では大きな葉を二枚付けるほどに成長している。慌てて自身を励まし、気を取り直してグリムを見た。

「グリムお兄様。今読んでいる魔法書にわからない単語が出て来たの。今度、教えてくれる？」

と、そこまで言ってから、ルクレツィアはバツの悪そうな顔をした。

「……あ、でも、お兄様は雪銀^{アルゲンテウス}の魔兵団のお仕事に、ヴィレンの先生もしてるから忙しいよね」

しょんぼりとした様子で少し俯^{うつむ}くルクレツィア。グリムはルクレツィアの紫色に煌めく夜空のような黒髪を撫でてやった。

「何言ってるの、ルクレツィア。兄というものは、妹のためなら何ごとも放り出して、最優先に駆けつけるものだよ」

そしてニコツと優しく笑うグリムに、落ち込んでいたルクレツィア表情はみるうちに晴れ渡っていく。

「お兄様、だーい好き！」

勢いよく抱き付いてくるルクレツィアを、グリムは優しく受け止め、そして幸せそうな表情で抱きしめ返した。

しばらくグリムと他愛もない会話をしていたルクレツィアだったが、大きな欠伸^{あくび}をひとつついでしまう。

「ヴィレンの訓練はまだまだ終わらないし、少し眠ったら？」

グリムはそう言って、自身の両太ももをぼんぼんと軽く叩いてみせる。それは、二人の間で自然と決まった膝枕の合図だ。

ルクレツィアは嬉しそうに笑って、甘えるようにグリムの太ももの上に頭を乗せて横になった。

ずれたブランケットを掛け直してやりながら、グリムは「眩^{まよ}しくない？」と尋ねて、ルクレツィアの目元に影ができるように手をかざしてやった。

「うん、眩しくないよ。それにすごく、あったかい……」

ブランケットに包^{つつ}まり、ルクレツィアは幸せそうに笑った。体だけでなく、心まで温かくなっていく。

ルクレツィアは、安心してきつた穏やかな表情で目を瞑^{つぶ}ると、イスラークに帰還してからの半年間のことを思い返していた。

帝都では誰からも「役立たず」と蔑^{あざわ}まれ、嫌われていたルクレツィアだったが、イスラークでは皆が彼女を守り慈^{いづ}しんでくれている。優しい愛情もあれば厳しい愛情もあると知り、ルクレツィアもまた、自身を愛することができたのだ。

優しく温かな人々に囲まれて、ルクレツィアは満たされていた。

自分には、愛して守ってくれる存在がいる。ルクレツィアの頭には、父デイトリヒの姿が浮かぶ。そして、竜族の友人ヴィレンや兄のような存在のグリム、厳しくも優しい伯母^{おば}のレオノーラといった大切な人達の姿が次々と浮かんだ。

愛される心地よさと、守られる安心感。それらが傷だらけだったルクレツィアの心を癒やし、自

信を与えてくれる。

ずっとこの幸せな毎日が続くことを、心から願っている……

気付けばルクレツィアは寝落ちしていて、小さな寝息をたてはじめた。

(……かわいい)

グリムは、そんなルクレツィアの寝顔を見つめながら思った。

(僕の妹は、世界で一番可愛い)

ルクレツィアと初めて出会った日を思い出す。

帝都の駅のホームで一人転びそうになっていた少女へ思わず手を伸ばした日から、グリムとルクレツィアの縁は始まった。愛らしい笑顔を浮かべ、真っ直ぐにこちらを見つめてくるルクレツィアから、なぜか目が離せなかった。

掴んだルクレツィアの手があまりにも小さくて、温かくて柔らかくて、脆い存在なのだと知った。彼女もまた、自分と同じように孤独を抱えて生きてきたのだと知った。

『私のお兄様になって!』

ルクレツィアが自分を「兄」と呼んでくれた日から……いや、初めて出会った日に温かな笑顔を向けてくれたあの日から、ルクレツィア・クラウベルクは血は繋がらなくとも心の絆で結ばれた、グリムの大切な妹となった。

何があっても守り抜きたいと思う、たったひとつの存在だ。

今では魔塔の魔術師の間だけでなく、城の使用人達や雪銀の魔兵団の兵士達の間でも、ルクレ

ツィアは「クラウベルクの天使」と言われている。

(当然だよ。だってルクレツィアは、こんなに小さくて愛らしくて素直でいい子なんだもの)

すっかり兄バカへと変貌を遂げたグリムは、ルクレツィアの寝顔から目を逸らすことなく誇らしげに思っていた。

「グリム」

そこへ、一人の男が近付いてくる。

「あ、イクス隊長」

ルクレツィアの従兄であり、グリムの上官である、イクス・スペンサーだ。

「なんだ。ルクレツィアは寝てるのか?」

イクスは爽やかな笑顔を浮かべながら、眠っているルクレツィアの顔を覗き込むように立つ。そして人差し指で小さな従妹の柔らかなほっぺをそっと突いた。

「はあ、ルクレツィアは本当に愛らしいなあ」

普段は頼もしい背中を見せてくれる、皆の憧れの上官イクス隊長なのだが、ルクレツィアの前だとまるで別人のように締まりのない表情で破顔する。

上司のその豹変(ひょうへん)ぶりにグリムは内心、うわあ……と思いながら、イクスのデレデレとだらけきった顔を見つめていた。すると、彼とぼつちり目が合ってしまった。

「グリム、お前……そんな顔で俺を見ているけどな。ルクレツィアに甘えられている時のお前の顔も、今の俺と大して変わらないぞ」

「えっ……」

イクスに自信満々にそう言われて、グリムは思わず言葉を失ってしまった。

（僕……ルクレツィアと一緒にいる時、イクス隊長みたいな、だらしない顔をしてるの……？）
シヨックを受けた様子のグリムに、イクスは「どうした？」と首を傾げる。

「僕は、妹の前では少しでも格好いい兄でありたいと思って……それなのに、無意識のうちにイクス隊長と同じ顔をしていたなんて、シヨックで……」

「お前、俺に対して失礼なことを言ってる自覚あるか？」

呆れた表情のイクスに、グリムはハツとして「すみません！」と謝った。

「謝られると、それはそれで虚しいんだが……」

グリムに悪気がないからこそ、心にくるものがある。イクスはもう、笑うしかなかった。

「ところで、母さん……いや、スペンサー夫人の授業はそんなに厳しいのか？」

イクスは気を取り直して、心配そうな表情を浮かべた。ルクレツィアが夜遅くまで勉強をしていることを知った上での発言だろう。

グリムは少し考えてから、遠慮がちに小さく頷く。

護衛として、これまでルクレツィアの側で見守ってきたからこそわかる。レオノーラの授業内容は普通の家庭教師よりもはるかに高度で、そして厳しい。大量に出される宿題を、ルクレツィアは毎日こつこつと取り組んでいるのだ。

正直、まだ十歳の女の子にスパルタが過ぎるんじゃないかと思っている。

グリムの様子を見て、イクスは「やつぱり……」と呟きながら、バツが悪そうに頭をかいた。

彼が思い出すのは先月、スペンサー一家が珍しく一堂に会し、晩餐^{ばんさん}をとにした日のこと――

スペンサー侯爵家の主人であるアスゲイルが、妻であるレオノーラに苦言を呈したことがきっかけだった。

「レオノーラ。まだ幼い女の子に、少し厳しいんじゃないか」

すると、それまで黙々と食事をしていたレオノーラが手を止め、静かに顔を上げた。レオノーラは夫であるアスゲイルを真っ直ぐに見つめる。

「厳しい……とは？」

「聞いたところによれば、ルクレツィアは君に出された宿題のせいで、毎日遅くまで起きているそうじゃないか」

幼い姪を想ってのアスゲイルの発言なのだが……レオノーラは眉をびくりと動かし、ワイングラスに手を伸ばすと、ワインの香りを立たせるようにグラスをゆつくりと揺らす。

「クラウベルク公爵家の後継者に合わせた授業レベルです。実力が伴えば、宿題も大した量じゃありませんよ。夜遅くまでかかってしまっているのは、単にあの子の実力不足です」

なんて冷たい物言いだ。堂々とそう言い放つレオノーラに、アスゲイルだけでなく息子のイクスまで呆れて開いた口が塞がらなかった。

「母さん、それはあまりにもルクレツィアに冷たい」

我慢できず、イクスもアスゲイル陣営に参戦した。

「なあ、カイン兄さんもそう思うだろう？」

そして、我関せずの顔で黙々と食事を進めているカインを仲間に引き入れようと、イクスは目配せをする。しかし、兄は弟に目も向けず無視した。

（兄さんに期待した俺が、馬鹿だった）

イクスはカインのこういった無関心な態度に慣れている。兄を仲間に引き入れる作戦はきっぱり諦めると、父とともに母を責め立てた。

「ルクレツィアがかわいそうだ！」

「あの年頃の子は、思いつき遊びたいはずだ！」

「うるさい。二人とも、お黙りなさい」

レオノーラは苛立った様子でイクスとアスゲイルを睨みつける。二人が黙るのを見ると、仕方ないといった様子で小さく息を吐き、そして心の内を明かし始める。

「貴方達、ご自身がどれだけ無責任な発言をしているのかわかっているのですか？ 数年後、ルクレツィア様はそのお立場から再び帝都に戻り、皇立アカデミーに通わねばなりません。その時、忌々しい帝国貴族どもに……失敬、周りの者達にまた馬鹿にされたら？」

レオノーラの言葉に、イクスとアスゲイルはハツとした顔をして黙った。

そして、それまで無関心を貫いていたカインの手が止まる。

「帝都で過ごしていた数年間、ルクレツィア様は『魔力なし』と馬鹿にされ、周りの子供達から酷

い虐めを受けていました。そして、子供の模範となるべき大人達は、その虐めを諫めるどころか黙認していた……」

レオノーラの冷やかな美貌が、怒りと悔しさに歪んでいく。

唇を強く噛み締め、押し殺していた感情があふれ出す。

「あの子が苦しんでいる間、私達は何も知らずにのうのうとイスラークでただ過ごしていたのよ！」
目を赤くして、後悔に満ちた瞳で大きな声を上げたレオノーラは、心を落ち着けるためか、小さく長い息を吐いた。

「私は、その者達を見返したいのです。今後一切、私の大切な姪を馬鹿にされないように……そのために、ルクレツィア様にしてあげられることを全力で行う。ルクレツィア様の教育に心血を注ぎ、彼女の完璧な淑女としての道を切り開いてあげたいのです」

それを聞いて、レオノーラに非難の声をあげる者はもういなかった。イクスもアスゲイルも、自分達の浅はかさから言葉を失い、ただ申し訳なさそうに俯く。

しかし、レオノーラはそんな彼らを見逃さない。

「それにしても」

レオノーラの青紫色の瞳が鋭く光り、顔立ちのよく似た屈強な男二人を真っ直ぐに見つめる。

「まるで自分達が正義のように私を責め立ててきましたが……それはルクレツィア様ご本人の望みなのですか？」

「い、いや……そうではないが……」

普段は堂々とした精悍な顔つきのアスゲイルだが、まるで怒られている大型犬のように肩を丸め、しょんぼりした表情を浮かべている。

「旦那様の発言は、ルクレツィア様から学ぶ機会を奪うことになるのですよ。よく考えて物申しなさい。よろしいですか？」

「はい……」

母に完敗した父の情けない姿を見つめながら、イクスはこのスペンサー家においてレオノーラに勝てる者などいないと改めて実感したのだ。

「イクス、貴方もよ」

「はい！」

イクスが白旗を振る気持ちで素直に返事をする、レオノーラは頷いて再び食事に戻る。

食卓の空気は、耳が痛いくらいに静かになってしまった。

「父さん、よく母さんみたいな性格のきつい人と結婚できたな」

果敢にも、イクスは父アスゲイルにぼそりと言った。

すると、意外にもアスゲイルは幸せそうに笑った。

「確かにお前の母さんは厳しい人だけれど……でも、嘘は言わないし、芯の真つ直ぐとした素敵な女性だ。それに、ふと見せる笑顔がすごく可愛いんだ」

アスゲイルの言葉が聞こえたのか、レオノーラが咳払いをする。いつもボーカーフェイスな彼女の頬が、少し赤らんでいるように見えた。

（恋は盲目とは恐ろしいな……あの母さんを可愛いだなんて、この世に父さんくらいいいしかないぞ……）

イクスは予想外に両親の仲睦まじい姿を見せ付けられたことで、もう何も言わずに大人しく食事に戻ることにした。

そんな中でカインだけが、先ほどから食事の手を止めたまま、何かを考え込んでいた。

「……ルクレツィアがいずれ、帝都に戻る、だと？」

カインの小さな呟きは誰の耳にも入っていない。普段は冷淡で無機質な彼の薄紫の瞳に、静かな決意が満ちていることなど、家族の誰も気付いていなかった。

——この一件以来、イクスはルクレツィアの教育について意見することをやめた。

その結果、ルクレツィアは相変わらず厳しい授業に耐えて、夜遅くまで宿題をこなす毎日……

（ルクレツィア。こんな頼りがいもない、不甲斐ない俺を許してくれ……）

イクスは心の中で涙を流しながらルクレツィアに謝っていた。

そこに、小さな黒竜が飛んできて、イクスの頭に勢いよくしがみつく。

イクスは黒竜の体を両手で掴み、頭から下ろし、紫の瞳と目を合わせた。

「おい、ヴィレン。飛びつくなよな」

「イクス。組手練習は終わったぜ！ 次は——」

ヴィレンはそう言いかけてから、ルクレツィア（とグリム）に気付いた。訓練に夢中で、二人が

来たことに全く気付いていなかった。

「——ルーシー！ 来てたのかよ！」

ヴィレンは黒竜の姿のまま、「なんだよ、早く言えよ」と嬉しそうに声を弾ませ、イクスの手の中から抜け出して眠っているルクレツィアのもとへと飛んでいく。

「おい、おーきーろー！」

そして、あるうことかヴィレンは、その小さな竜の前足でルクレツィアの肩を揺らし始める。周りが慌ててヴィレンの行動を止めようとする前に、ルクレツィアは眉をひそめてうつすらと目を開けてしまった。

「ん、うう……ん……」

「おはよう！ こんな昼間から居眠りなんて、寝坊助だな、ルーシーは！」

竜から少年の姿になったヴィレンが満面の笑みでルクレツィアの顔を覗き込む。ルクレツィアは少し寝ぼけている様子を見せたが、ヴィレンの笑顔が視界いっぱいに広がると、ふにやりとした笑顔を見せる。

「ヴィレン……、訓練終わったの？」

少しでもルクレツィアを寝かせてあげたいと思っていたグリムは、思わず眉をひそめて責めるようにヴィレンを見た。

「ヴィレン、君ね……」

「どうせ、もうすぐお茶の時間だーって、レイモンドが呼びに来るだろ？」

ヴィレンが悪びれもせずにそう言ったところで、訓練所の入り口ハウスエントラードに家令のレイモンドがちやうど姿を現した。

「ほらな！」

「グリム、諦める。ヴィレンはこういう奴だ」

「……はあ」

勝ち誇った様子でニカツと笑うヴィレンに、イクスは苦笑いを浮かべる。グリムは呆れた様子で息を吐き、そして、何かを諦めたように無言でルクレツィアの乱れた髪を整えてやるのだった。

迎えに来たレイモンドに連れられてルクレツィア、ヴィレン、グリムはイスラーク城のある一室へと向かう。部屋に入ると、すでにアフタヌンティーが準備された丸テーブルに、ディートリヒとレオノーラが席に着いていた。

室内は全体的にアイボリーで統一された壁紙で、ブラウンが締め色に使われている。イスラーク城の庭園が見渡せる部屋で、今は亡きルクレツィアの母カレンが気に入り、生前はよくディートリヒやレオノーラとともにティータイムを楽しんでいたらしい。

音楽が好きだったというカレンのために、蓄音機ちくおんきが置いてあり、棚にはたくさんのレコードが並んでいる。ルクレツィアはこの部屋に来ると、母の存在を感じたくて、いつも音楽をかけてもらっていた。

「最近、帝国の貿易かぎの要である海路で問題が起きたらしい」

「皇帝には出征^{しゅつせい}を命じられているのですか？」

「まだわからない。その件で、近々西の魔塔主が……」

どうやら、ディートリヒとレオノーラは深刻そうな仕事の話をしているようだ。しかし、ルクレツィア達が入室したことに気付くと、二人はすぐに会話を止めた。

「来たか」

ディートリヒは先ほどの硬い表情が嘘のように柔らかな微笑みを浮かべ、愛娘ルクレツィアを自ら迎えに行った。

「ルクレツィア。今日は朝から会議があつたせいで、お前と顔を合わせられなかったから、寂しかったよ」

「お父様、私もです」

ディートリヒは軽々とルクレツィアを抱き上げて、娘としっかり目を合わせながら言った。ルクレツィアも嬉しそうに笑って、父の首に腕を回しハグをする。

そんな親子をじつと見つめるレオノーラの視線を受けて、ディートリヒは少し緊張した声で言い訳を述べはじめる。

「今、ここにいる使用人はレイモンドだけだから、俺がルクレツィアを抱いても、娘の公女としての体裁は損なわれないはずだ」

「私は何も申しておりませんが？」

レオノーラも席を立ち、相変わらず冷たい表情のままこちらへと近付いてきた。

「ルクレツィア様、ヴィレン様。ごきげんよう」

レオノーラの淑女として完璧な挨拶を受けて、ルクレツィアは父に下ろしてもらい、こちらも完璧なカーテシーで挨拶を返す。

「レオノーラ先生、ごきげんよう」

元々、ルクレツィアは帝都で皇太子妃教育を受けていたので、教養は十分身につけている。しかし、イスラークに帰還してからレオノーラの授業を受けるようになると、さらに磨きのかかった上品さや洗練さが身に付いた。

レオノーラもルクレツィアの挨拶に満足だったようで、静かに頷く。そして、彼女の青紫色の瞳は瞬時に、ルクレツィアの隣で無関係のような顔をして立っているヴィレンへと向けられる。

ヴィレンは顔をしかめて「うつ……」と、声を漏らしていた。

「……こんにちは」

ヴィレンもレオノーラにぎこちなく会釈^{えしやく}をする。その所作はまだまだ付け焼刃といった様子で、洗練さはない。しかし、その場にいたディートリヒやグリム、レイモンドはレオノーラにとっても感心していた。

（あの生意気でわがままなヴィレンに挨拶の作法を叩き込むとは……さすが、姉上）

ディートリヒに物珍しそうに見られていることに気付いたヴィレンは、少し気恥ずかしそうに顔を逸らした。

生意気を絵に描いたようなヴィレンが、なぜグリムやレオノーラを先生に迎え、大人しく教授さ

れているのか……

ヴィレンはチャリと隣に立つルクレツィアへと目を向ける。すると、すぐに彼女の紫色の瞳と目が合って、ルクレツィアは小首を傾げながらニコリと笑った。

ヴィレンの頬はみるみるうちに赤く染まっていく。

（俺だって、ルーシーの側にただいるだけじゃないんだ）

ヴィレンははじめ、宝石のようにキラキラと輝くルクレツィアの笑顔を気に入ったから、側にいたいと思った。

でも、ルクレツィアの側で日々を過ごしてみて、いろんな人達との出会いがあつて……ヴィレンは、ルクレツィアに恋をした。

そしてその日から、ルクレツィア・クラウベルクは、竜の大切な『宝石』^{おんなつこ}となった。竜は世界で一番の強欲者で、自分の宝石を守るためなら、なんだつてする。

グリムや、元婚約者のユーリ……それにこれから大きくなるにつれて、もっとたくさんの男達がルクレツィアの前に現れることだろう。

ライバル達を蹴散らし、ルクレツィアの隣に君臨するためには、ただ強いだけではダメなのだ。

（ここは魔族の国じゃない、人族の国なんだ。ただ強いだけじゃダメだ。ルーシーを守る力、公女であるルーシーの立場に見合う品位……人族の掟は面倒くさいことばかりだけれど、でも、それがルーシーの隣に立つ男として必要な条件なら、俺はクリアしてみせる！）

レオノーラは思わず、小さく笑ってしまった。

（ヴィレン様の挨拶は及第点には及びませんが……）

ヴィレンがここまで努力する理由を、教育者レオノーラは少年の純粋な恋心からだと思付いている。

なんとも健気で、いじらしい姿ではないか。

「まだまだ紳士には程遠い挨拶ですけど、この前の授業で習ったことをしっかりと覚えていましたね」

珍しくレオノーラに褒められて、ヴィレンは嬉しそうな表情を浮かべた。

「ですが、人前に出せるレベルではありません。来月にはイスラーク城に大勢の客人を呼び、盛大にルクレツィア様の生誕パーティーを開く予定です。それまでにヴィレン様は追加で補習を行いましょう」

「ほ、補習!？」

信じられないという表情で固まるヴィレンの隣で、ルクレツィアがおかしそうにクスクスと笑っている。

自分の不幸を楽しそうに笑うルクレツィアにムツとして、ひと言文句でも言つてやろうとするが……

（くそ。ルーシーの笑顔を見ると、怒りが続かねえ……）

惚れた方の負け、という言葉を実感しながら、ヴィレンは勢いよく開いた口を静かに閉じる。しかし、笑われたのは悔しかったので、文句の代わりにルクレツィアの柔らかなほっぺを軽く摘んで

やった。

「ヴィレン、何するの」

「うるせー。ばかルーシー！」

（呑気に笑いやがって。俺が、誰のために、こんなに努力をしてると思ってるんだ！）

ヴィレンの気持ちに全く気付きもしないお馬鹿なルクレツィアには、少しくらい意地悪をしても許されるだろう。

それからレイモンドに促され、ルクレツィア達はテーブル席に着き、楽しいティータイムがはじまった。

話題は来月に迫ったルクレツィアの生誕パーティーについてだ。イスラークに帰還して初めて開くパーティーということもあり、ディートリヒは、領地の貴族達を城に呼び寄せて、ルクレツィアをお披露目するのだと言った。

「ルクレツィアも来月には十一歳になるんだね。君が立派な淑女になる日も近いな」

「お兄様。私は今でも立派な淑女ですよ？」

「あはは。ごめん、ごめん。『ますます』立派な淑女、だね」

ルクレツィアがにいけるように頬を膨らませて見せると、グリムは愛おしそうに笑いながら言葉を訂正した。

「ふうん、ルーシーの生誕パーティーか。人族のパーティーに参加するのは、あの白い女のパーティーに参加して以来だな！」

帝都で参加したヴァイスローズ公爵家で開かれたローズ・ガーデンパーティー……白い女ことエリーチカとの因縁の出来事を思い出し、ヴィレンは一瞬眉をひそめたが、すぐにどうでもいいように笑顔を浮かべた。その笑顔からは、楽しみだという気持ちが見て取れる。

「ルクレツィア。お前のパーティーだ、全てお前が望む通りにしよう。どんな飾り付けがいい？」

ディートリヒも目を輝かせながらルクレツィアに尋ねていた。娘の要望を聞き逃さないよう、胸の内ポケットから素早くメモ帳を取り出している。そこに、普段の政務に取り掛かる寡黙で厳かな姿は一切なかった。

そんな和気あいあいとした雰囲気の中、レオノーラが厳しい口調で水を差す。

「ただの生誕パーティーではありませんよ」

四人は一斉にレオノーラへ目を向けた。

「このパーティーは、ルクレツィア様が次期公爵として、北方貴族達に後継者であると宣言する非常に重要なパーティーです。失敗は許されません」

レオノーラの言葉に場の空気が引き締まる。ディートリヒも緩んでいた表情を引き締めて、改めてルクレツィアを見た。

「そうなんだ、ルクレツィア。ただのお披露目ではない。俺はお前を、俺の後継者……将来のクラウベルク公爵として正式に貴族達に紹介するつもりだ」

父の言葉を聞いて、ルクレツィアは固まっていた笑顔からハッと目を丸くしていた。

（ルーシーが、次期公爵……？）

ヴィレンもまた、目を見開いてルクレツィアとディートリヒを見つめる。彼らと過ごしたこの数か月間で、人族の国における『公爵』がどのくらい高貴で高い地位なのか、ヴィレンもよく理解していた。

いつも隣で笑っている小さな少女が、遠い未来では北を束ねる公爵になる……今まで思ってもいなかったルクレツィアの将来の姿を想像してしまい、ヴィレンは変な気分になった。漠然と、置いて行かれたくない、そんな想いだけが、胸の奥で小さく膨らんでいく。

「お父様、私……」

父に真剣な眼差しを向けられたルクレツィアは、暗い表情で口ごもった。突然、現実を突きつけられ戸惑ったというのもある。しかし、それだけではない。

最近までルクレツィアは帝都の皇太子であるユーリの婚約者、つまり未来の皇太子妃として過ごしていたので、北方貴族と顔を合わせることはほとんどなかった。

実は、ルクレツィアが帰還する前は、未来のクラウベルク公爵の座にはカイン・スペンサーを、という声が貴族達から強く上がっていた。

カインはディートリヒの姉であるレオノーラの長子で、クラウベルク公爵家の血が色濃く流れている。それに次期魔塔主として申し分がないほど優秀な魔術師だ。

貴族達は、ディートリヒにルクレツィア以外の子供がいないのであれば、カインが後継者に相応しいと納得していた。

しかし、ルクレツィアと皇家の婚約も解消された今、後継者はルクレツィアだ。

北の領地は、吹雪く山地に頻発する魔獣の出現により、過酷な環境下にある領地だ。すると、領地の貴族達が主君に求めるのは、純粹な『強さ』。

北の覇者たるクラウベルク公爵は、最強の兵団である雪銀の魔兵団アルゲンテウスを率いて戦場に出ることになる。貴族達の多くは、魔法が使えないルクレツィアにその座が務まるわけがないと考えていた。

ルクレツィアを軽視しているつもりはない。ただ、事実を述べているだけ。しかし、ディートリヒは強硬な態度で、ルクレツィアを後継者から外さなかった。

そんな状況に、貴族達の不満が溜まっていることを、ルクレツィアは何となく察していた。

心の中で不安が勝ってしまいルクレツィアは遠慮がちにディートリヒへ尋ねる。

「……本当に、北の貴族の方々をお呼びするのですか？」

ディートリヒは落ち込む様子を見せる娘の頭を優しく撫でながらも、力強く頷いた。

「ルクレツィア、お前にはこの父が付いている。心配するな」

「お父様……」

ルクレツィアは頷いてみせながらも、しかし心は晴れなかった。

世間から『魔力なし』と呼ばれる自分は後継者として認められ難いだろう。それにまるで、カインの座を奪ったような気持ちになってしまう。

ルクレツィアのそんな気持ちを知ってか、ディートリヒは言葉を続けた。

「今回のパーティーで、お前を貴族達に紹介するよう提案したのは、カインなんだ」

「カインお兄様が？」

「ああ。カインを後継者にと騒いでいたのは周りの貴族達だけだ。公爵家からは明言したことは一切ない。それに、当の本人は全く気乗りしていなかったしな」

ディートリヒは「あいつは統治なんてどうでもよくて、魔法にしか興味がない男なんだ」と笑った。

（とはいえ、今はどうやら、魔法以外にも関心を持っているらしいが……）

ディートリヒはそんなことを考えながら、愛娘を優しく見つめた。

ディートリヒは当初、ルクレッツァの生誕パーティーは、身内だけで祝おうと考えていた。その方が帰還したばかりの娘も気兼ねなく楽しめるだろうから。

お披露目は、ルクレッツァが成人してからでいいと……それまでにルクレッツァが成長し、今よりも力を付ければ貴族達も認めるだろうと考えていた。

しかし――

『ディートリヒ様、公爵家臣下である北方貴族に、ルクレッツァの存在を知らせるべきです』

いつもなら仕事の報告が終わると、さっさと部屋から出て行くカインが、珍しく自ら提言してきた時のことを思い出す。

『……まだルクレッツァには荷が重くないか？』

『それは、彼女が魔法を使えないからですか？』

カインの冷淡な瞳が真っ直ぐにディートリヒを見つめていた。

『ルクレッツァが魔法を使えないのなら、代わりに魔塔の魔術師達が使えばいい。彼女が魔法を使

えないことに、何の問題が？』

つまり、次期魔塔主であるカインは、ルクレッツァが魔法を使えなくとも、魔術の叡智^{えいち}がつまつた魔塔の力は、彼女のものだと言いたいのだ。

魔塔はどこにも属さない。クラウベルク公爵家の私兵である雪銀^{アルゲンテウス}の魔兵団とは違い、独立した魔法研究のための組織だ。公爵家に忠誠は誓わない。しかしもし、そんな魔塔がルクレッツァの後ろ盾になると誓うのなら……北方貴族達もルクレッツァを認めざるを得ないだろう。

そして、きつとカインは今回のパーティーでその事実を見せつけ、貴族達を黙らせたなのだ。

「ルーシー！ お前には俺もいるぞ！」

ヴィレンの大きな声にディートリヒはハッとす。これまで会話を聞いていたヴィレンが、興奮した様子で話を続けた。

「俺がお前の矛盾^{むじ}となり、盾^{たて}となる。もう誰も、ルーシーに文句なんか言わせねえ……だから」

そこで言葉を切ったヴィレンは椅子から立ち上がると、ルクレッツァのもとへ行く。皆が彼に注目する中、ヴィレンはゆっくりとルクレッツァの目の前で片膝を突いた。

「今回のパーティーで俺を、ルーシーのパートナーにしてくれ！」

緊張した様子で頬を赤らめながら、ヴィレンは承諾を求めるようにルクレッツァへそつと手を差し出した。

ルクレッツァは差し出されたヴィレンの手を見つめながら、少しの間呆けてしまった。

「ルーシー？」

ヴィレンは頬を染めたまま、小首を傾げて反応のない彼女を呼ぶ。

ルクレツィアは、パーティーではヴィレンと一緒に過ごすだろうと、いや、過ごしたいと思っていた。

でも、こうして正式にパートナーを申し込まれてみると、何だか緊張してドキドキしてしまう。パートナーを申し込まれる経験はこれが初めてだ。これまで何度かユーリとともに行事に参加したことはあるが、それはただの婚約者としての義務だった。

だから、自分が心から認めたパートナーはヴィレンがはじめて。

ルクレツィアは速くなる鼓動を胸に、椅子から立ち上がると、ヴィレンに差し出された手をぎゅっと掴む。すると、ルクレツィアよりも少し大きなヴィレンの手が握り返してきた。

「うん。よろしくね、ヴィレン……！」

照れくさそうに笑うルクレツィアを見て、ヴィレンも安堵したように輝く笑顔を見せた。

周りにいた大人達は、嬉しそうに手を繋ぐ二人を優しい目で見守っていたのだった。

「何も心配することはないぞ、ルクレツィア」

ディートリヒが優しい瞳で言う。

「ここにはお前を傷付ける者はいない」

「ディートリヒ様やヴィレンだけじゃない。僕や……雪銀の魔兵団の皆だって君の味方だよ」

続けてグリムも同調するように言った。ルクレツィアは温まっていく心を胸に、しっかりと頷く。

（私はもう、一人じゃない）

守ろうとしてくれる人がこんなにもいるのだ。

イスラークには、ルクレツィアがずっと求めていたものがある。このまま、優しい人々に囲まれて幸せに暮らしていけるのだろう……

（……でも……）

ルクレツィアはふと思った。

（お父様の後継者として、私はこの先、ただ守られているだけでいいの……？）

幸せに満ちあふれながらも、そんな漠然とした不安と疑問が、ルクレツィアの胸の奥へと染み渡るのだった。



魔塔の図書館で本を読んでいたルクレツィアは、本の最後のページを捲り終わり、顔を上げた。

図書館では司書マイロ・ブリツカーが本の修復作業を行っている。見慣れたいつもの光景だ。

ヴィレンとグリムは魔法の特訓中のため、珍しく二人とも側にいなかった。

（二人はまだ特訓中かな？）

ルクレツィアが魔塔の図書館で本を読み始めてから、気付けば三時間近く経っていた。

長時間同じ姿勢で読書していたからか、身体中が固まっている。筋肉をほぐすように背伸びをしていると、視界の端に見知らぬ男性が一人見えた。

(誰だろう?)

男性は、ルクレツィアの席から少し離れた場所にある本棚の前に立ち、手に持つ本を読んでいる。ルクレツィアは頻繁に魔塔を訪れ、他の魔術師達と交流しているが、その男性をこれまで見かけたことがない。年齢はデイトリヒと同じくらいに見えた。

医者を思わせる白衣を身にまとい、モノクルの奥には知性が宿る。静かに佇むその姿には、自然と目を奪われる上品さがあった。

なにより、陽に照らされた青い髪は、まるで穏やかに流れる川のように揺れて、とても綺麗だった。

ルクレツィアの視線に気付いたのか、青髪の男が読んでいた本から顔を上げる。思いがけず目が合ってしまった、ルクレツィアは緊張しながらも軽く会釈した。

「こんにちは、お嬢さん」

そして、予想外に青髪の男は笑顔でルクレツィアのもとへと近付いてきたのだ。

「こんにちは」

ルクレツィアはぎこちない笑顔を浮かべて挨拶を返す。元より人見知りの性格に加えて、知らない大人を見ると帝都で暮らしていた頃の冷たい大人達を思い出してしまい、無意識に体が強張ってしまう。

男は彼女の手元にある書物へと視線を落とした。

「すごいな。まだ小さいのに、もうこんなに難しい本を読んでいるのかい？」

親し気に話しかけられて驚いたが、男の優しいような雰囲気と温かな笑顔を前にとすると、ルクレツィアの緊張も少しずつ解けていく。そして何より、褒められて素直に嬉しかった。

「興味があつて読んでいますが、わからない部分も多いので……私はまだまだです」

ルクレツィアが照れくさそうに目を伏せながら答えると、男はニコリと微笑んでルクレツィアの隣の席へと腰を下ろした。

「人を待つて暇しているんだ。わからないところがあれば、私でなければ解説してあげよう」

「え？」

ルクレツィアは驚いて顔を上げる。

「どこだい？」

小首を傾げてルクレツィアの顔を覗き込んでくる。男の金色の瞳は光を反射してキラキラしていた。

「あ、えつと……ここです」

ルクレツィアが遠慮がちに本の文面を指さすと、男は「どれどれ」と、本の中へと目を向ける。

「魔法理論についてか。そうだね、これはつまり……」

男はそれから、小難しく書かれている本の内容を、子供のルクレツィアにもわかるように、かみ砕きながら丁寧に説明してくれた。

説明が一通り終わったところで、真剣に話を聞いていたルクレツィアは、目を輝かせながら顔を上げた。

「すごく、わかりやすいです！」

「それはよかった」

ルクレツィアが笑顔で男を見ると、彼もまた優しく微笑んでいた。

「ありがとうございます。あの……」

ルクレツィアの中で、青髪の男に対して感謝と親しみが大きくなっていた。

「貴方のお名前は……？」

「ああ。申し遅れて悪かったね。私の名は——」

「セルゲイ、ここにいたのか」

ディートリヒが図書館の入り口に現れた。

「ルクレツィアも一緒だったのか？」

「お前は忙しそうだったし、ここで待たせてもらっていたよ」

図書館に入ってきたディートリヒは、ルクレツィアのもとへ真っ直ぐやって来る。

セルゲイと呼ばれた青髪の男は、穏やかな笑顔のまま、ディートリヒを見上げる。

「もしかして、こちらのお嬢さんが例のお前の愛娘なのか？」

セルゲイはそう言いながら、ルクレツィアを見る。

「そうだ。……二人で何をしていたんだ？」

ディートリヒは目元を優しく細めながら、セルゲイとは反対の、ルクレツィアの隣の椅子に腰を下ろした。

「こんにちは、お父様」

ここ最近、忙しそうにしているディートリヒと顔を合わせたのは、数日前のティータイムぶりだ。嬉しくて、笑いながら父に挨拶をする。

ディートリヒはルクレツィアの頭を優しく撫でた。そして、抱き上げようと手を伸ばしてきたのだが……ディートリヒは少し考える素振りを見せ、伸ばしていた手を引っ込めた。

そして、セルゲイの方へと向き直る。

「セルゲイ、紹介しよう。私の娘のルクレツィア・クラウベルクだ」

父の紹介に、ルクレツィアは慌てて椅子から立ち上がって、セルゲイに丁寧なカーテシーをする。

「はじめまして。ルクレツィア・クラウベルクです」

「可愛らしいお嬢さんだ」

ルクレツィアが顔を上げると、セルゲイは椅子に座ったまま優雅にお辞儀をした。

「私はセルゲイ・リンドナー。君のお父さんと同じ魔塔主をしている。私の魔塔は西にあるから、見たことはないだろうがね」

セルゲイの言葉にルクレツィアは驚いて目を丸くする。つまり、今……両手に魔塔主という、魔術師達が羨む贅沢な状況だということだ。

（私、魔塔主様に勉強を教わっていたの？）

喜びと戸惑いが半々で、ルクレツィアは何とも言えない表情になっていた。すると、ルクレツィアの表情がくると変わっていく様が面白かったのか、セルゲイは声を上げて笑った。

「よろしく。そう緊張せず、気軽に接してくれ」

セルゲイはルクレツィアに握手を求めるように手を差し出してきた。ルクレツィアは反射的に彼の大きな手を握る。

すると、手にパチリと電気が走った。

「いつ……」

「おっと。静電気かな？」

驚いた表情を浮かべるルクレツィアに、セルゲイはクスクスと笑って手を離す。

（なんだ、静電気か……）

乾燥する冬の季節は仕方ないのかもしれない。ルクレツィアもセルゲイに笑い返す。セルゲイはルクレツィアをまじまじと見つめながら、ディートリヒに言った。

「ディートリヒ。本当にこの子はお前の娘かい？ お前と違って愛嬌あいきょうのある子じゃないか……よかったよ、父親に似なくて。奥さんに感謝だな」

「何を言っている。ルクレツィアはどう見ても俺似だろう？ ほら、目元とか俺とそっくりで……」ムキになるディートリヒと、それを見ておかしそうに笑うセルゲイ。

ディートリヒをこのようにからかう人なんて、イスラークでは見たことがない。ルクレツィアは新鮮な気持ちで二人を見上げた。どうやら彼らは気心の知れた仲らしい。

「お父様と西の魔塔主様は、お友達なのですね」

ディートリヒとセルゲイをキラキラした瞳で見上げるルクレツィアに対し、セルゲイは優しく微

笑んだが、ディートリヒは少し不満そうな顔をした。

「友人ではない。セルゲイとは学院アカデミーの頃に知り合っただけだ」

「お前、寂しいことを言うなよ」

ディートリヒは否定したが、ルクレツィアの目から見れば二人は十分、友人関係に見える。

「ルクレツィア。今度、ディートリヒの学生時代の話を聞かせてあげようか？」

「お父様の昔のお話ですか!？」

「セルゲイ。悪ふざけが過ぎるぞ」

ルクレツィアは是非聞きたいと思ったが、ディートリヒはあまり自分の過去を聞かれたくないようにセルゲイを睨み付けていた。

セルゲイは「わかった、わかった」と、ディートリヒを宥なだめるように頷いてみせる。そして、ルクレツィアへと目を向けた。

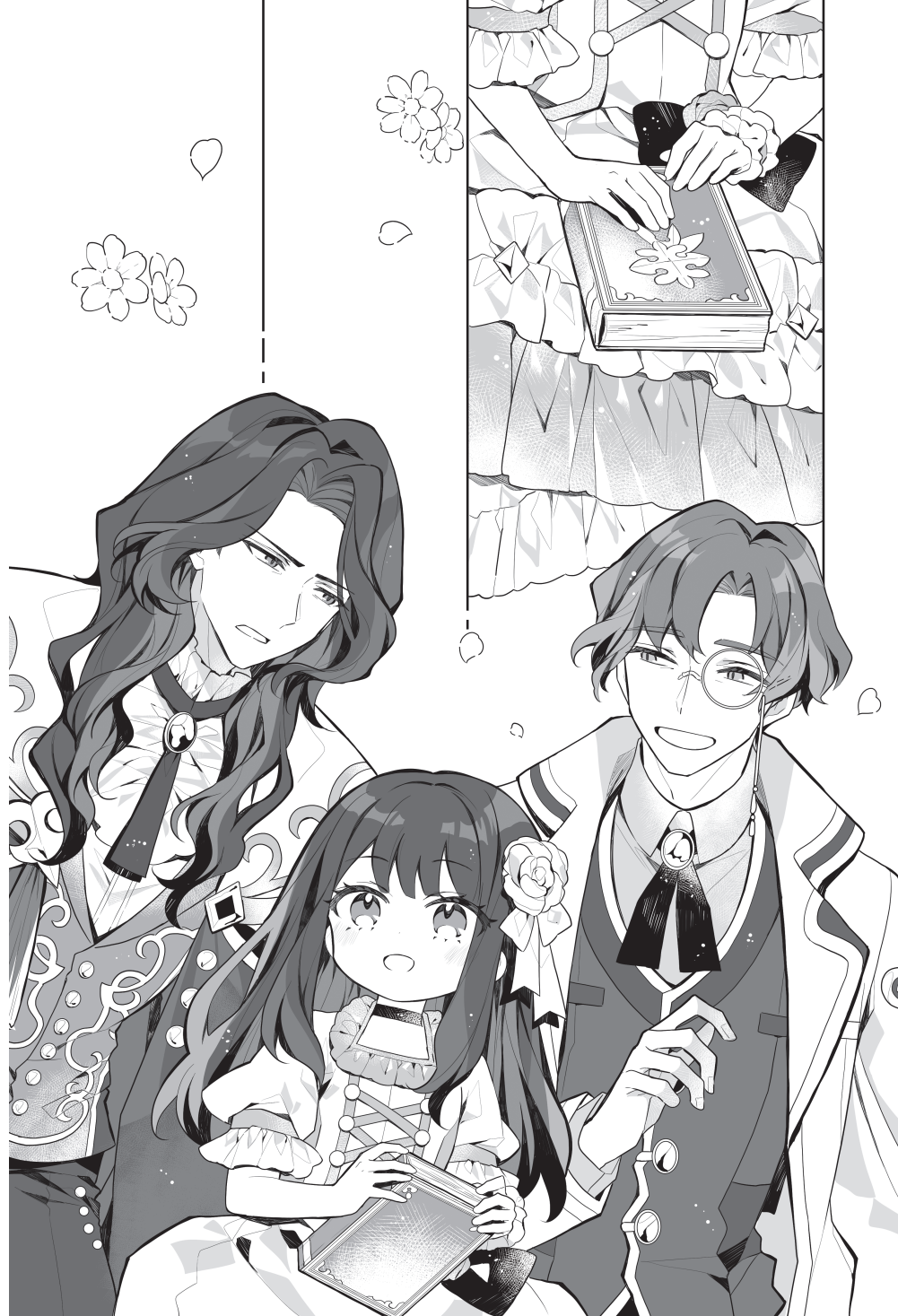
「すまない。君のお父さんは怒らせると怖いから、逆らえないんだ」

セルゲイは肩をすくめて見せながら、からかうような笑みを浮かべていた。

（西の魔塔主様は、優しくて、気さくで……明るいお方だな）

父の昔話を聞けなかったのは残念だけれど、ルクレツィアはセルゲイの穏やかで人当たりのいい雰囲気好感を持った。

「父親同士は残念ながら友人になれなかったみたいだが、娘同士なら友人になれるかもしれない。ルクレツィア、いつか西の魔塔へ遊びにおいで」



どうやらセルゲイにも娘がいるらしい。娘はルクレツィアの一つ年下ということだった。ルクレツィアには、ヴィレンという初めてできた大切な友人がいるが、同性の友人はいない。だから、いつかセルゲイの娘と会ってみたいと心から思った。

セルゲイは楽しそうに娘の話を聞かせてくれた。娘をとっても愛していて大事にしている父親の姿だった。そう、ディートリヒと同じように……

ルクレツィアはチャリとディートリヒを見上げる。すぐに目が合い父は笑いかけてくれた。

ディートリヒはルクレツィアの視線にすぐに気付いてくれる。それは、ディートリヒもまた、ルクレツィアを見つめているからなのだろう。

「お父様。セルゲイ様は明るくて素敵なお方ですね」

「……そうだな」

ルクレツィアのささやきに、ディートリヒは一瞬だけ複雑そうな顔を見せたが、すぐにニコリと笑い、ルクレツィアの小さな頭を撫でてやる。

（セルゲイ。やっと立ち直ったんだな……）

ディートリヒがセルゲイ・リンドナーに会うのは五年ぶりのことだった。

五年前、最後に彼と会ったのは……リンドナー夫人、つまりセルゲイの妻の葬式の日だった。明るくユーモアがあり、その人当たりのよさから学生時代から友人が多かったセルゲイ。そんな彼が、葬式では人目も憚らずに声^{こゑ}を上げて泣き、憔悴^{しやうすい}しきっていた。

その時のセルゲイの痛々しい姿は今でも、ディートリヒの目に、嫌というほど焼き付いている。

（奥方が亡くなった後、社交活動は一切行わずに西の魔塔に引きこもり、研究に明け暮れていると聞いていた……）

この五年間、西の魔塔主としての名声を聞くことはあったが、セルゲイがどんな様子で過ごしているのかは、知る術がなかった。ディートリヒ自身も、つい最近まで皇族との約束のために国境の防衛前線の指揮官として駆け回っていたので、それどころじゃなかった。

同じく妻を亡くし、同じく娘を育てる父親の身として、ディートリヒはセルゲイが心の傷から立ち直ってくれたことを喜ばしく思う。

葬式の日、セルゲイは小さな子供を抱きしめながら泣いていた。

（きつと、娘の存在がセルゲイの心の傷を癒やし、生きる活力を与えたのだろう……俺のようにな）

カレンという最愛の妻を亡くしたディートリヒにとって、生きる意味はルクレツィアだ。かつては娘とすれ違い、自分の不器用さから娘を傷付ける結果を招いてしまったが、もう絶対に選択は間違えない。

もしすれ違っていたままだったら、ディートリヒはカレンに顔向けできなかった。

ルクレツィアとの絆を取り戻すきっかけとなってくれたヴィレンには、本人が思っている以上にディートリヒは心から感謝している。

ルクレツィアがいてくれるから、ディートリヒも頑張れる。愛する娘のためならば、父親は何にだってなれるのだ。

その時、ふとディートリヒは不思議に思った。

（セルゲイの娘は、葬式にいたのだろうか……？）

ディートリヒの脳裏に、妻を亡くしたセルゲイと、幼い子供が寄り添い合って泣いている記憶が思い浮かぶ。普通に考えれば、父と娘が、妻であり母である女性の喪失を悲しんでいたのだろう。ただ、なんとなく違和感を覚えたのだった。

五年も前のことで、記憶があいまいだ。考えても答えは出ない。ディートリヒはすぐに思考を切り替え、セルゲイに言った。

「セルゲイ。お前がわざわざここに来たのは、例の港の件だろうか？」

「そうだ」

ディートリヒとセルゲイが真剣な表情になる。仕事の話が始まるのだと悟ったルクレツィアは、少し寂しい気持ちになる。久しぶりに会えたディートリヒと、もつと一緒にいたかったから。

だから、寂しいと伝える代わりに、ルクレツィアはディートリヒの腰に抱き付いて言った。

「お父様。お仕事、頑張ってくださいね」

するとディートリヒは、眉尻を下げて柔らかな表情を浮かべ、ルクレツィアに微笑みを向けた。図書館から出て行ってしまう二人の後姿を見送っていると、入れ替わるようにヴィレンとグリムが入室してきた。

ヴィレンが立ち止まり、すれ違うセルゲイをジッと見つめる。その隣で、グリムはセルゲイを知っているのか、二人の魔塔主に敬意を込めて挨拶をしていた。

「二人とも、特訓お疲れ様」

ルクレツィアが二人のもとへ近づくと、扉の向こうに鋭い視線を向けていたヴィレンがこちらを振り返る。その表情は、眉をひそめていて不機嫌そうだった。

「ルーシー。あの青髪のやつ、誰？」

「西の魔塔主セルゲイ・リンドナー様だよ」

ルクレツィアが答えると、ヴィレンは険しい表情のまま「ふうん」と相槌を打つ。

「ルーシー、あいつに何かされたらすぐ俺に言えよ」

ヴィレンの忠告にルクレツィアが何か言う前に、グリムが口を出す。

「セルゲイ様は、長年医療魔法を研究されている魔術師だ。彼が発案した医療魔法はこれまでたくさんの人々を救ってきたし、帝国の医療技術を大きく発展させたお方だよ」

「……あいつから、血の匂いがした。それに」

グリムは不愉快そうにヴィレンを見た。

「血の匂い？ 怪我人相手に手術を行っていたら仕方がないんじゃないかな。彼は僕が尊敬する魔術師の内の一人で立派なお方なんだ、根拠もなく貶め^{おとし}ないで」

グリムはずいぶんセルゲイを尊敬しているらしい。冷たい口調でそう言い切ると、さつさと図書館の外へと出て行ってしまった。グリムはルクレツィアの護衛なので、きつと扉の外で待っていているだろうけれど……

「根拠なら他にも……！」と、反論しようとするヴィレンを、ルクレツィアは咄嗟^{とつさ}に止めた。

ルクレツィアも実際にセルゲイと話してみても、彼のことをとても人格者だと感じたのだ。

ヴィレンは話を聞いてもらえないどころか、一番の友達だと信じていたルクレツィアさえもグリムの味方なのだとわかり、悔しそうに表情を歪めた。

その姿を見て、ルクレツィアは申し訳ない気持ちになり、少し思い直す。

（ヴィレンが初対面の人を悪く言うのって、珍しいかも……）

確かにヴィレンはわがままで怒りっぽいけれど、理由もなく人を嫌ったり不機嫌になるような人ではない。

「……ね、ヴィレンの言う根拠って？」

外にいるグリムには聞こえないように、ルクレツィアが小声で尋ねると、ヴィレンは不貞腐れた様子でポツリと答えた。

「死臭だよ」

「え？」

「血の匂いだけじゃない、肉が腐ったみたいな死臭もしたんだ」

ヴィレンはそれだけ言うと、グリムに続くようにさつさと図書館から出て行ってしまった。取り残されたルクレツィアは思う。

（死臭……それは、ちよつと、怖いかも……）

もしかしたらグリムの言う通り、血と同じで、死臭も医療研究や手術の過程で染み付いてしまったものなのかもしれない。

でも……。思わずゾクリと背筋が凍ったルクレツィアは、青い顔で慌てて二人の後を追ひ、図書館から出て行ったのだった。



魔塔内のある一室では、ディートリヒとセルゲイが真剣な表情で話し合っていた。

「なるほど……西部にある港の海路で、魔獣大発生が発生した疑いがあるのか」

「ああ。先日 of 北部の山村で起きた幽鬼族の事件……。あの時も魔獣大発生が起こったと聞いた。もしや、港の件も幽鬼族が関わっているのではないかと思つてね……」

セルゲイの言葉に、ディートリヒは以前討伐した幽鬼族を思い出す。差別によつて娘を奪われ、魔術師を恨みながら幽鬼族になった哀れな母親のことだ。

「……幽鬼族が関与しているかは定かではない。山での魔獣大発生は、生前に調教師だった彼女が引き起こしたものだ」

「彼女？ ……ディートリヒ、今、幽鬼族を『人』扱ひしたのか？ 珍しいな、お前が……」

セルゲイが何を言いたいのかは、わかつている。この世に幽鬼族を人として扱う者などいない。幽鬼族は人ではない。恐ろしい人喰ひ化け物だ。

「……そんなことより、部下ではなく魔塔主であるお前が直々に来た理由があるんだろう？」

ディートリヒが話題を変えたことで、セルゲイはこれ以上踏み込まれたくないのだと悟り、何も

言わずに彼に合わせた。

「皇帝からの勅令で、私は西の魔術師を編成して、その問題の海路を調べさせた……が、全滅したよ。私が信頼する優秀な魔術師達は皆死んだ。唯一生還した魔術師も魔塔に到着するなり、間もなく息を引き取つた」

セルゲイは苦しそうに顔を歪めて俯いた。

「彼が死に際に見たもの全てを話してくれた。海の中は大量の『腐肉魚』達が狂つたように泳ぎ回り、津波を引き起こしていた。そして、空には一匹の『船旅の歌声』がいたと……」

「船旅の歌声？」

ディートリヒは、顔を険しくさせた。

「待て。船旅の歌声は聖獣だろう。聖獣は調教師ではなく召喚師の領域。魔獣を操るのは訳が違ふぞ」

召喚師が使役する聖獣は、特別な存在だ。魔獣と違い人を襲わないし、そもそも野良の聖獣をお目にかかること自体が稀。聖獣が召喚師と絆を結び、召喚獣となつてやつと人目に触れる。

「ああ、だからお前に海路の調査に力を貸してほしいんだ。お前の部下には貴重な召喚師がいると聞いて……」

「……さらに、幽鬼族の関与が疑われているなら、俺が動かないわけにはいかないな」

セルゲイはディートリヒと同じ魔塔主という立場にいるが、セルゲイの研究している医療魔法は戦闘向きではない。相手が幽鬼族となれば、セルゲイだけで対処するのは難しいだろう。

だから、セルゲイが偉大なる魔術師と呼ばれるディートリヒに助力を願うのは、至極当然のことだった。

セルゲイの話を聞き終えたディートリヒは小さく息を吐くと、口の中で何やら呪文を唱えた。するとすぐにカインがやって来た。

「お呼びですか？」

カインはノックもせずに部屋に入ると、セルゲイの姿を視界に捉える。しかし、特に何の反応も示すことなくディートリヒへと目を向ける。

「カイン。俺は明日の朝に雪銀^{アルゲンテウス}の魔兵団を率いて西部へと向かう。魔塔を空けるから、留守を頼むぞ」

「明日の朝、ですか。急ですね」

「来月はルクレツィアの誕生日だからな。一刻も早く片付けるためには仕方がない」

ディートリヒは一度言葉を切り、躊躇^{ためら}いながらも続けた。

「今回の出征には召喚師^{サミイ}であるグリムも連れて行く。ルクレツィアとヴィレン……子供達のことを頼む」

「わかりました」

カインが淡々とした様子で頷く。

セルゲイが申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「私の力不足で君達の魔塔主を借りることになり申し訳ない。ディートリヒの不在を埋めることは

できないだろうが、助けが必要な時はいつでも頼ってくれ。私でよければ、力を貸すよ」

ニコリと優しい目付きで笑うセルゲイ。カインは冷めた無機質な瞳でセルゲイを見つめ返した後、静かに「ありがとうございます」と短く礼を言った。そして、ディートリヒへお辞儀をし、部屋を後にした。

カインは退出をしたその足で図書館へ向かい、司書マイロ・ブリツカーを訪ねる。

「——ということで、ディートリヒ様がお戻りになるまでお前がルクレツィアに付いている」

「な、なぜ俺なんですか!? 頼まれたのはカイン様なんじゃ……」

カインより一連の事情を聞いていたマイロは、急に子供達の世話係に任命され、心底驚いた。正直、子供の世話なんてやったこともないし、やりたくもない!

(ルクレツィアだけならまだいい。しかし、ヴィレンの世話まで……)

マイロは図書館のルールをいつも破るヴィレンのことが嫌いだ。素直で愛らしいルクレツィアとは違い、ヴィレンは生意気でわがままだ。好きになる要素なんてまるでない。

「俺は今立て込んでいて忙しい。お前は図書館で二人とよく顔を合わせているだろう。だからお前に任せる」

「そんなあ……せめて、俺じゃなくて他の魔術師に……」

理不尽極まりない上司^{カイン}の様子に、マイロは自分の意見は聞き入れてもらえないことを悟り、絶望して肩を落とすのだった。